

令和7年度 学力向上に係る効果的な取組事例

『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実』を
目指した取組事例

越谷市教育委員会

事例1

○学年・教科名 小学校 第6学年・算数

○単元名 「比例の関係をくわしく調べよう」

○本時の目標 変化する2つの数量の関係を表や式、グラフで示し、その特徴を理解し、生活に活用することができる。

導入

実物の提示



6時間目
重さや厚さの関係を
使って数を数えない
で画用紙を用意でき
るのだろうか。

6時間目
一枚一枚数えずに用意
するには、どのようなと
ころに注目して、比例の関
係を使えば良いだろう
か。



実物の提示や工夫された発問等により問題への関心を高め、取組への意欲を喚起したことにより児童は「こうすればできるのではないか」という解決の見通しを周りや自然と話し合い始めていた。

本時の課題を各自で考えさせ、全体で確認することで「今日解決することは何か」を児童に把握させた。また、本時で働かせたい数学的な見方に気付かせ、解決の見通しを児童の思考を妨げない程度に確認し、自力解決に向かわせた。

展開

自力で解決
教科書で解決
友達を参考に
先生に聞く

ペアで解決
タブレットで解決
ヒントカードで解決

個別最適な学び

画用紙の枚数と重さ	
枚数 (枚)	10 300
重さ y (g)	92 2760
式・答え	説明
$92 \div 10 = 9.2$ $9.2 \times 300 = 2760$ 答え 2760g	10枚が92gなので、1枚はその10分の1の9.2gになります。それが300枚あるので、9.2の300枚となります。

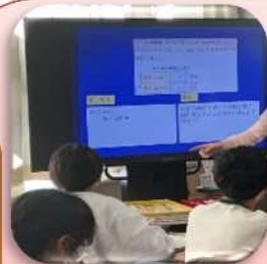


協働的な学び

「自力で解決」「友達を参考に」「ヒントカードで解決」「教科書で解決」等の多様な学び方や「ノートに書きこむ」「タブレット端末に書き込む・打ち込む」など、まとめ方を個々に選択して取り組めるようにした。

タブレット端末やノート上では、根拠を基に論理的に思考することができるように内容を工夫した。見通しで表をもとにして、数量の変化の仕方(横)、2つの数量の関係(縦)に着目することを確認しているため、児童が比例の考え方をもとに3つの解法を導き出した。また、友達と協働した学びを行うことで考えの広がりや解法への理解が深まった。

終末



児童の考えを提示し、練り上げる

児童と対話しながら練り上げていくことで、クラス全体でそれぞれの解法がどのように考えられているのかを理解することができた。

ま 画用紙を数えずに用意するには、
↓
今までの比例の関係をを使って重さは枚数に比例するという条件にして表を縦に見たり、横にいたりすると求められる。

まとめは、途中まで書いて、教師が児童と対話しながらまとめるなど児童自身が考えて書いた。

《振り返りの合言葉》

①思ったこと ②疑問なこと ③知りたいこと ④学んだこと

①②の視点での振り返り

最初は重さだけかなと思っていたけれど厚さがあったか！と目から鱗でした。

③④の視点での振り返り

y の数がわかっていなくても他の y の数がわかっていたら求められるようになりました。

その他(次時、生活の中など)の視点での振り返り

②この勉強は結構普段の生活にも生かせそうだなと思いました。

振り返りは、「お・ぎ・し・ま」の合言葉を視点として、自らの学びを振り返ることができた。

事例2

○学年・教科名 小学校 第6学年・音楽

○単元名 「和音のひびきや音の重なりを感じ取ろう」

○本時の目標 つくった旋律をつなげたり重ねたりして、17小節の音楽をつくることができる。

導入



音楽は「活動を通して学ぶ教科」であるため、まず音楽活動から入っている。本時で自分が表現する音楽について演奏したり、前時の内容をみんなで確認したりしながら、「今の自分がどんな表現ができるのか」「どこまで理解しているのか」を把握した。

音楽づくりに向けて、「2つのめあて」「前時までの既習事項」「音楽キーワード5」から今日は何に注目して学んでいくのかという「解決の見通し」と「音楽づくりの約束」から「活動の見通し」を捉えさせた。

展開



個別最適な学び



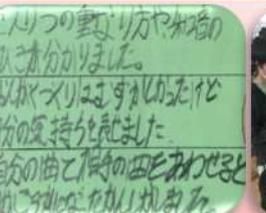
協働的な学び



二次元コードのコンテンツを活用し、作った旋律をつなげたり、重ねたりして17小節の音楽づくりを個人で行った。「何度も作り変えて、試すことができる」「すぐに共有できる」「協働して取り組める」などのICTのメリットを最大限に活用しながら、音楽づくりをする、聴く、修正する…を繰り返すことで音楽表現を追究することができた。

作った作品を低音と和音に合わせてグループ内で発表する際に、自分の思いや意図を伝えてから聞かせた。そうすることで聞き手は作品の良さや面白さを見つけて発表者に伝えるとともに、それを参考に自身の作品を修正するなど、言語活動と表現活動の往還が何度もされていた。これにより、児童は音楽表現をさらに高めていた。

終末



他の班の「思いや意図」を捉えながら、全体で多様な音楽表現の工夫に触れた。「なぜ、その表現の工夫をしたのか」について交流させることで、今後の児童の「対話内容」や「音楽表現への追究」の質を高めた。

本時の音楽的な見方を意識しながら、自らの学びを振り返らせたことで、学びの内容をより深く理解したり、学び方を考えたり、今後の学習につなげたりすることができた。また、作品を作って終わりではなく、今まで工夫した表現を学級全体で共有し最後に歌唱することで、活動を通して成長や変容を実感できるようにした。